

『棒になった男』

解説

「棒になった男」は何を表しているのか？

本文には「生前、なにか一定の目的のために、人に使用されていた」(p.198)、「全身傷だらけになるまで、逃げもせず、捨てられもせずに使用に耐えた」(p.199)と書かれており、**男が使役される立場の人間で、相当な負担を強いられていたことが考えられる。**

さらに、「生きていた棒が、死んだ棒になっただけ」(p.199)、「すぐまた誰かに拾ってもらえるだろうさ。」(p.203)と書かれており、亡くなったのは彼の命ではなく心など別のものであること、棒の生死は社会的には重要視されないことが考えられる。**これらのことから、「棒になった男」は過度な労働で考えることをやめた男**を表していると言える。(生徒氏名)

「棒になった男」は何を表しているのか？

「棒になった男」が何を表しているのかについて考察する。本文には「生前、なにか一定の目的のために、人に使用されていた(p.198)」、「かなり乱暴な扱いを受けていたみたい(p.198)」、「すべての道具の根源(p.199)」と書かれている。このことから、「棒」はどんなことにも利用されることができ、自分の意思で動くことはできないことだと思った。即ち、誰かが使うことによって使用する意味を果たしているが、本来の意味としてそこに「棒」自身の自由はないということである。(生徒氏名)

「棒になった男」は何を表しているのか？

まず棒がどんな存在かを考える。本文には棒がp.139「その吠え立てる都会の滝壺に目も眩む思いでじっと耐えていた」と書かれている。滝壺は上から下に水が流れ落ちて行き着く場所であり、**上からの滝に強く打たれてる**ことを表す。また、地獄の女のp.198「人に使用されていたことを意味している」という言葉に対し棒もp.198「当たり前じゃないか、誰だって…」と独白したことから、**棒が誰かに使われる側であり、使う側の存在があること**が分かる。

また本文中で、**棒の話す言葉は地獄の男女とフーテン男女には聞こえていない。**

この2つのことから**棒は、上下関係がはっきりしている組織の中で、自分より大きな権力を持つ上司から強いプレッシャーを受けつつも、自分から行動を起こすことも意見を伝えることもできずに雇われていた会社員**だと推測する。さらに本文中では「死亡者の九八・四パーセントが棒だったっていうくらいだからね」と書かれている。**ここから、男と同じような状況で亡くなり、棒になった人が世の中に多くいた**ことがわかる。（生徒氏名）

「棒になった男」は何を表しているのか？

地獄の男・地獄の女がいることによって 地獄の男・女によるエチュード(詩のよ
うなも の)の中の月とプラスチックなどの対比で現代社会では何でもモノ化さ
れている。 人間性の喪失によって人間の「抹殺」や「棒」になるケース(=社会基
盤に取り込まれたモノ)に変身するケースが増えつつあることを提示しており、
地獄の女「次の人も、やはり棒かしら？」と発言していることから、**男だけが**
「棒」でなく、すべての人間は「棒」もとい「ゴムホース」のような物と同様で
あると指している。
棒になった男とは、**人間が社会制度に取り込まれ、生存競争、所有欲などによっ**
て人間性を失いつつあることが示されている。つまり、人間のモノ化が行われて
いる。 (生徒氏名)

「棒になった男」は何を表しているのか？

本文P208には「男は棒の形に閉じ込められて身動きも出来ず 心配なのだ」とあり、棒というともものはいくつあっても棒だけでは何の役にも立たず、1人でも、更に仲間同士でも何をすることも出来ないものであることがわかるが、P199には「全ての道具の根源」と言われている。利用されることで役に立つことが出来るのだ。つまり、この社会の人々の過半数を占める棒たちは、共に暮らしているようで、隣合っているようで、実は何の関わりも持っていないということを示しており、この社会には仲間など対等な関わりはなく、利用する、利用されるという何らかの主従関係しか存在しなくなっていることを伝えている。(生徒氏名)

「棒になった男」は何を表しているのか？

私は「棒になった男」とは、労働者として生きるうちに、組織の上部に存在する人間の言いなりにしか動けなくなり、その苦痛や屈辱で自ら命を絶った男を暗喩していると考える。

188ページの14行目より、フーテン女の『いま、断絶の時代なのよ。私たち、疎外されてんの。』という言葉がある。この言葉から、**疎外された人間の行き場や居場所は、『棒になった男』における社会には用意されていない。**本書が発行された年代には、1949年からの特需景気をはじめとし、**日本が血気盛んに戦後復興を遂げた背景**がある。しかし、その後、第1次オイルショックや完全失業率が100万人を突破したといういわば不景気な時代もあった。経済発展を遂げてきた社会において、人々の比較的前向きだった心持ちも、やや悲観的な感情へと移行していったのではないだろうか。**そのような不安定な精神状態に陥った場合、いわゆる『フーテン』となるか、『棒になった男』のように自分の身を削り極端な選択を取るか、という選択肢しか残されない。**「棒になった男」とは、組織に貢献するために働くものの、労働環境の劣悪さなどにより最終的には朽ち果ててしまった人を表していると考える。

((生徒氏名) 前半)

【まとめ】 「棒になった男」は何を表しているのか？

「生きていた棒が、死んだ棒になっただけ」(p.199)

→男は死ぬ前も棒だった（「棒」の比喻で表されるような存在だった）

「生前、なにか一定の目的のために、人に使用されていた」(p.198)

「全身傷だらけになるまで、逃げもせず、捨てられもせずに使用に耐えた」(p.199)

→男は使役される立場・過酷な使役に耐えてきた

p.205 「棒になった男、（中略）、ここに至って、あらゆる情念が、極度の怒りと絶望の間で完全に化石してしまう」

P.208 「おれは、一度だって、満足だったことなんぞありやしないぞ。しかし、いったい、棒以外の何になればいいって言うんだ。この世で、確実に拾ってもらえるものといやあ、結局棒だけじゃないか！」

→棒であることに満足であると感じてはいないが、棒になる以外の選択肢も残されていない。

「棒の森」は何を表しているの
か？

「棒の森」は何を表しているのか？

その当時会社勤めをしていた人達にとって上司に従うのは至極当然の時代だったわけだが、心の内で自分の意思を表に出せないことに対し不満や理不尽さを抱いていた人は少なくなかっただろう。しかし、ほとんどの人はそういった社会の風潮自体に疑問を持つことも、それらを変えるため自分が立ち上がろうと思いつくことも無い。そういうものだからと抵抗すること無くあっさり受け入れ、受け入れたものに対して不満ばかり募らせていく。そして自分もまたその風潮に吞まれていってしまう。したがって、「棒の森」とはそういう人々全体を指した言葉ではないかと思う。（生徒氏名）

「棒の森」は何を表しているのか？

本文中では「死亡者の九八・四パーセントが棒だったっていうくらいだからね」と書かれている。**ここから、男と同じような状況で亡くなり、棒になった人が世の中に多くいたことがわかる。**

P.204で地獄の男は「満足していたからこそ、棒になったんじゃないか。」と地獄の女に話している。**p.209では地獄の男が観客席に向かって「見たまえ、君をとりまく、この棒の森...もっと違った棒にはなりたくても、棒以外の何かになりたいなどは一度も思ったこともない、この罪なき人々...」と叫んでいる。**

このことから「棒の森」は棒が理不尽な環境に満足していないが、実際に棒以外の何かに変わろうとしない保守的な人間である事と、観客自身が棒であることを表現していると考える。(生徒氏名)

【まとめ】 「棒の森」は何を表しているのか？

P.201 「死亡者の九八・四パーセントが棒だったっていうくらいだからね」

P.209 「君をとりまく、この棒の森」

→世界に「棒になった男」がたくさんことを示している。

→その「棒」たちは、使役されるばかりの存在である。

P.209 「進み出て、客席をぐるりと指差し」

→観客もそうした可能性であることを示唆

→社会への風刺

「都会の滝壺」は何を表しているのか？

「『都会の滝壺』は何を表しているのか。」について考察する。まず、滝壺と聞いて想像できるのは、修行に使われるくらいで誰も入りたがらない、**また大量の水で息ができなくなるということだ。これはまさに、先述した絶え間なく仕事に追われる人々の状況を鮮明に象徴している**だろう。また、そんな滝壺に落ちるといのはどういうことだろうか。**現実から少し離れたと感じる屋上という地点から下を見下ろすと、いつもの厳しい現実が広がっている。そこに引きずり込まれるように落ちていくといのは逃げられない現実を象徴している**のではないか。（生徒氏名）

「都会の滝壺」は何を表しているのか？

また、都会の滝壺についてだが、滝壺というのは滝の下にある深い溝のことある。人々はこの滝壺に落ちないように誰かに利用されるように必死に流れに逆らって生きていたのではな いかと考えた。そこから利用価値がないと手放されたものや、自ら手を離れたものが滝壺におち、深い溝の中で棒として、再び誰かに利用されるのを待つ、待つことしか出来ないとい う人々の状況を表しているのだ。P193にある「吠えたてる都会の滝壺」というのは深い溝の奥底から利用されることを待つ大勢の棒の唸り声なのではないかと考えた。（生徒氏名）

【まとめ】 「都会の滝壺」は何を表しているのか？

P.193 「その時、おれは、（中略）ぼんやり下の雑踏を眺めていた。渦だ...見る...一面の渦だ.....」

P.193 「その吠え立てる都会の滝壺に、目も眩む思い出じつとたえていたとき、息子がおれをよんだのだ。三分間十円の望遠鏡覗きに、おれをさそおうとして.....」

→①都会の滝壺に落ちないようにじつと耐えていた

②息子が望遠鏡（都会の滝壺を覗く物）におれをさそった

③棒になって落ちてしまった

「棒」である男にとっての厳しい現実・逃れられない現実・棒が落ちるところ

③ 「地獄の男」「地獄の女」がいることによって、人の生死について、この舞台がどのような世界観であることを表されているのか？

生前に労働者として組織に属していた棒になった男が、組織の上にいる人間にぞんざいに扱われ、肉体的にも精神的にも異常をきたしていたことを暗喩している。これに対し地獄の男は『全身傷だらけになるまで、逃げもせず、捨てられもせずに使用に耐えた、有能にして誠実な棒と言うべきなんだ。』『棒は、誰にとっても、同じ棒さ。』（204ページ・1行目）と述べている。地獄の女が棒になった男のバックグラウンドを予測し同情する一方で、地獄の男は、棒になった男の功績を褒め称えている。

（中略）両者の立場から「棒になった男」を見ることで、一人の人間が決して労働というものだけに縛られるべきでないことを示唆している。加えて、私は本書から、過労死や過労により精神を患う人がいる現代を風刺していると感じた。本書が発行された年代から今日にかけての勤務問題を原因の一つとする自殺者数の推移を見ると、やはり増加している。ゆえに、働き方について今一度考える必要がある現代社会を表しているといえる。

（（生徒氏名） 後半）

【まとめ】 「地獄の男」 「地獄の女」 がいることによって、人の生死について、この舞台がどのような世界観であることを表されているのか？

地獄の男・地獄の女 観点の違い

→ どちらの観点も考えられうる

P.182 「運命の皮をむく 果物ナイフ」

P.183 「月はよごれた 弁当箱の色」

→ 唯物論的な世界観の描写

「永訣の朝」「棒になった男」で 学んでほしかったこと

観点（到達目標）	タグ	A
思考を的確な文章で表現することができる	15	戯曲の本文を引用したうえで、引用した箇所には解釈を加え、問いに対して説得力のある答えを記述することができる。

- 「論理を用いて味わう」ことの良さ
→ 「純粹に味わう」というのも、数ある鑑賞法の一つにすぎない
- 人文学の意義
→ 「その立場になってみること」「思想・社会の問い直し」

「棒になった男」の解釈例

キーワード：

疎外

「疎外」

哲学で、人間が、事物や他の人間とかかわるうちに、自己から引き裂かれて本来あるべき自己の本質を奪われてしまい、自己にとって疎遠であるという状態。

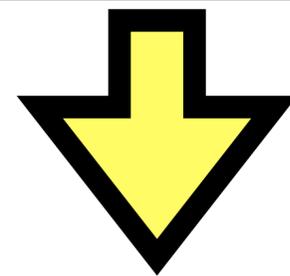
引用元：“そ-がい [..グワイ] 【疎外・疏外】”，日本国語大辞典（小学館），ジャパンナレッジSchool, <https://school.jpanknowledge.com>,（参照日：2021/1/19）

どのような「疎外」があるか？

P.205 「極度の怒りと絶望」

P.208 「おれは一度だって、満足だったことなんぞありやしないぞ、しかし、いったい棒以外の何になればいいんだ」

本来：棒以外の何かになりたい



疎外

現実：棒以外になる選択肢がない

どのような「疎外」があるか？

P.188 「いま、**断絶の時代**なのよ。私たち、**疎外**されてんの。」

P.Fドラッカー 『断絶の時代』 (ダイヤモンド社,1969)

「選択肢を前にした**若者が答えるべき問題は、正確には、何をしたらよいかではなく、自分を使って何をしたいかである**。多元社会は一人ひとりの人間に対し、自分は何か、何をしたらよいか、自分を使って何をしたいかを問うことを求める。**この問いは就職上の選択の問題に見えながら、実は自らの実存にかかわる問題である**」

「今日ふたたびわれわれは、昔からの問いである一人ひとりの人間の意味、目的、自由という根源的な問題に直面している。**世界中の若者に見られる疎外の問題が、この問いに答えるべきことを迫っている**。組織社会が、選択の機会を与えることによって、一人ひとりの人間に意思決定を迫る。自由の代価として責任を求める」 (『断絶の時代』)

どのような「疎外」があるか？

P.188 「いま、**断絶の時代**なのよ。私たち、**疎外**されてんの。」

P.Fドラッカー 『断絶の時代』 (ダイヤモンド社, 1969)

「**断絶の時代**」；新技術・新産業の誕生/世界経済の変化/社会と政治の変化/知識の性格の変化など、**急激な変化によってそれまでと大きく変化した時代**

「**疎外**」；社会が急激に変化したことにより、若者は自己決定の重荷を背負うこととなった。しかし、自己決定は苦しいので、自己決定が必要のない在り方（全体主義）を求めるようになった。**若者の疎外とは、若者が自己決定を放棄することである。**
自己決定の放棄＝疎外（思考の放棄・進んで道具になろうとしている）

『棒になった男』を 「疎外」から読む

- ・ **疎外**；人や個人としての本質を失っている状態
= **モノ化している状態**
- ・ 「棒になった男」も「フーテン男・女」も、**疎外されている**
- ・ 観客に対して「棒の森」と言う = **観客も疎外されている**
- ・ 『棒になった男』という作品は、
「疎外」に満ちた社会を演劇という手法によって描いた作品

「疎外」を手がかりにして
読もう

安部公房

『赤い繭』

「疎外」と『赤い繭』

- ・ 「疎外」と関わっていきそうな箇所に線を引こう
- ・ 「この作品が何を描いているか」がわかったら、それもメモしよう

「赤い繭」を読み解く鍵となりそうな箇所は？

【p.〇〇「~~~~~」】



「疎外」と『赤い繭』

- ・ 俺 ; 主体 (意思を持ち行動する)
- ・ 赤い繭 ; 物 (所有される物)
- ・ 家 ; 物 (所有される物)

「疎外」と『赤い繭』

主体

物

繭になる前

俺

~~家~~

繭になった後

~~俺~~

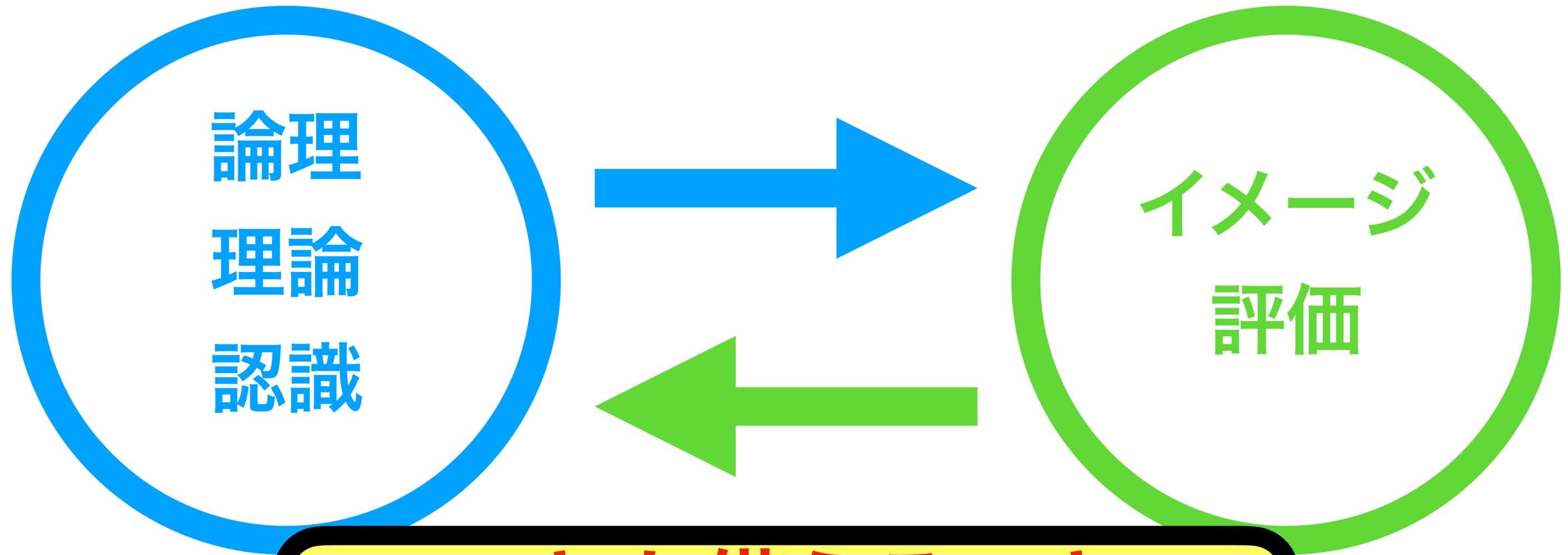
家

物を持たため者は
物になる

安部公房作品の良さ

- 論理や理論に支えられた、物語としての深さ
- さまざまな表現・作品展開の工夫
- 参照) Twitter 「安部公房BOT@abekoubou_bot

作品の観賞



二つとも備えることで
豊かな解釈につながる

「永訣の朝」「棒になった男」で 学んでほしかったこと

観点（到達目標）	タグ	A
思考を的確な文章で表現することができる	15	戯曲の本文を引用したうえで、引用した箇所解釈を加え、問いに対して説得力のある答えを記述することができる。

- 「そのまま味わう」のではないことの良さ
→ 「純粹に読む」というのも、数ある読み方の一つにすぎない
- 人文学の意義
→ 「その立場になってみること」「思想・社会の問い直し」

文学を読むときに

(ちょっと) 意識してほしいこと

- 論理的に読む・理論を援用して読む
- 自分の表現に対する感性を大切にす
- 「つまらない・面白い」の評価の前に一歩考える

どういう意味？

上野千鶴子

「男性は身体から疎外され、
女性は身体へと疎外される」

「男性は**身体から疎外**され、
女性は**身体へと疎外**される」

男性；女性の身体を「見る」ばかりで、
自己の身体を意識する機会が少ない

女性；人格などとは無関係に、
身体によって自己が評価される